S-3

語彙意味論から見た「語」の多面性*

由本陽子　（大阪大学名誉教授）

y.yumoto.hmt@osaka-u.ac.jp

1. はじめに

「語」の性質とは？

Lexical Integrity Hypothesis　（「語の形態的緊密性」の仮説）

"No syntactic rule can refer to elements of morphological structure." (Lapointe 1980: 8)

前提として、形態部門（語形成部門）と統語部門をそれぞれ自律したものとする仮説があった。(影山 1993: 10-11, 伊藤・杉岡 2002: 6-8, DiSciullo and Williams 1987)

(1) 機能範疇や屈折接辞の排除：　*アメリカから帰り、*焼いたざかな、*shoes box

(2) 外部からの修飾の禁止：*[大きな魚]釣り(cf. 魚釣り)、*[とても甘]納豆(cf. 甘納豆)

(3) 形態的不可分性：首相は国際会議に出席した→*首相が会議に出席したのは国際だ

(4) 語彙照応の制約：*鮎釣りに行って、お昼にそれ（＝鮎）を食べた。

本発表の主張

・語の緊密性は、音韻・形態統語・意味の側面において独立に規定され、ミスマッチもあり得る。

・V2 の意味が希薄化し、意味的には、一人前の動詞としての機能をもたないように見える語彙的複合動詞においても、項や統語的選択素性の受け継ぎにおいては、V2 が主要部動詞として機能している。

2. 日本語の V1-V2 型複合動詞の「語彙的緊密性」と形成部門

◎影山 (1993)

①複合動詞は語彙部門で形成されるものと統語部門で形成されるものとに区別されると主張。

← 統語構造上ひとかたまりの「語」を成すかどうかの緊密性

(5) V1 の「そうする」による代用　← (4)

a. 遊び暮らす　→*そうし暮らす、押し開ける→*そうし開ける　（語彙的）

b. 走り続ける　→そうし続ける、 調べ終える→そうし終える　（統語的）

(6) V1 の主語尊敬語化

a. ノートに書き込む→*お書きになり込む、番号を聞き逃す→*お聞きになり逃す　（語彙的）

b. 歌い始める→お歌いになり始める、電車に乗り損ねる→お乗りになり損ねる　（統語的）

(7) V1 の受身化

a. *書かれ込む、*押され開く　（語彙的）

b. 曲が演奏され始めた、皆に愛され続ける街、主人公が殺されかける　（統語的）

(8) V1 にサ変動詞をとる

a. 貼り付ける／*接着し付ける、沸き立つ／*沸騰し立つ　（語彙的）

b. 見続ける／見物し続ける、調べ尽くす／調査し尽くす　（統語的）

(9) V1 を重複構文形式（V に V）にする

a. *行方不明の子供を探しに探し歩いた、子供たちに愛情を注ぎに注ぎ込んだ　（語彙的）

b. 事実をひた隠しに隠し続けた、鍛えに鍛え抜かれた体、運がつきにつきまくった　（統語的）

②いっぽうで、「「語」という言語単位に備わった形態的緊密性」は、形成部門に関わらず、共通して見られるとし、「モジュール形態論」を提唱。　(影山 1993: 336)

◎影山 (2013a, b, 2021)

---

* 本発表内容については、窪薗晴夫氏、沈力氏、長屋尚典氏と関西レキシコンプロジェクトのメンバーの方々から貴重なご意見を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。なお、本発表内容は由本(2023)と部分的に重なる。

③語彙的複合動詞を形成する V2 のうち、「V1 の概念的意味に対して何らかの語彙的アスペクトの意味を添加する」ものを L-asp と名付け、形態構造も異なると主張。

(10) a. 手段：V1 することによって、V2　（切り倒す、押し開ける）
　　b. 様態：V1 しながら V2　（転げ落ちる、語り明かす）　　主題関係複合動詞
　　c. 原因：V1 の結果、V2　（歩き疲れる、焼け死ぬ）
　　d. 並列：V1 かつ V2　（忌み嫌う、慣れ親しむ）
　　e. 補文関係：V1 を（が）V2（見逃す、編み上げる）　　アスペクト複合動詞
　　f. 副詞的関係：V2 が副詞的に V1 を補強（晴れ渡る、咲き乱れる）

> 一般に、複合語の構成要素の意味関係は、①並列的複合語　②総合的複合語 (Synthetic compound)　③限定的複合語 (Attributive compound)　という分類で捉えられている。
> →e を失くしてしまうことは理論的に問題では？ (cf. Scalise 2009 a.o.)

・影山のアスペクト複合動詞と主題関係複合動詞の区別の基準

<1>　V1, V2 のどちらが意味の中核を成すか。

(11) a. のろい殺す→のろって、殺す　　（主題関係）
　　b. 見逃す　→　*見て、逃す　　晴れ渡る　→　*晴れて、渡る　（アスペクト）

(12) a. 「鍵をこじ開けたのですか？」　「はい、何とか開けました/*こじました。」（主題関係）
　　b. 「まったく呆れかえりましたねえ？」　「はい、本当に呆れました/*かえりました。」
　　（アスペクト）(影山 2013b: 11)

　　cf.　「ベルが鳴り止みましたね？」　「はい、止みました。」　（アスペクト）
　　「彼は資金を貸し渋ったのですか？」　「はい、渋りました。」（アスペクト）

(13) a. 「昨夜薬を飲み過ぎましたね？」　「*はい、過ぎました。」　（統語的）
　　b. 「課長に報告しそこないましたね？」　「*はい、そこないました。」（統語的）
　　c. 「名前を記入し忘れましたね？」　「はい、忘れました。」（統語的）
　　d. 「論文を書き終わったのですね？」　「はい、終わりました。」（統語的）

→　V2 の意味の希薄化が要因であり、語彙的アスペクト複合動詞の特徴とは言えない。

<2>「アスペクト複合動詞のほうが主題関係複合動詞よりも緩やかな結びつきである」
(影山 2013b: 34)

その根拠：語彙的複合動詞には不可とされていた「V1 に V1」の反復が可[1]　(cf. (9))

(14) a. *医務室に駆けに駆け込んだ　（主題関係）
　　b. 大会を目前にして選手たちは走りに走り込んだ　（アスペクト）
　　c. 頼みに頼み込む、上りに上り詰める、冷えに冷え切った、咲きに咲き乱れている、冴えに冴えわたる、騒ぎに騒ぎたてる、叱りに叱り飛ばす、沸きに沸き返る　（アスペクト）

→ しかし影山によれば、この形式は語と同様の緊密性があるとされており、[2]モジュール形態論に従えばその形成規則は、語彙部門・統語部門にかかわらず適用されても不思議はない。

・この形式の可否は必ずしも「主題関係」vs.「アスペクト」という意味関係に対応していないのでは？

(15) a. 学生時代より経験を｛積みに積み重ねた結果　vs. 積みに積み上げた結果｝、希望していた大学教授になった。
　　b. 旧友と語りに語り明かした夜　vs. 泣きに泣き暮らした日々
　　c. *トーナメントを｛勝ちに勝ち進んだ　vs. 勝ちに勝ち抜いた｝。(影山 1993: 91)
　　d. *恋人を待ちに待ちくたびれた。 vs. *敵を待ちに待ち構えた。 (影山 1993: 91)

---

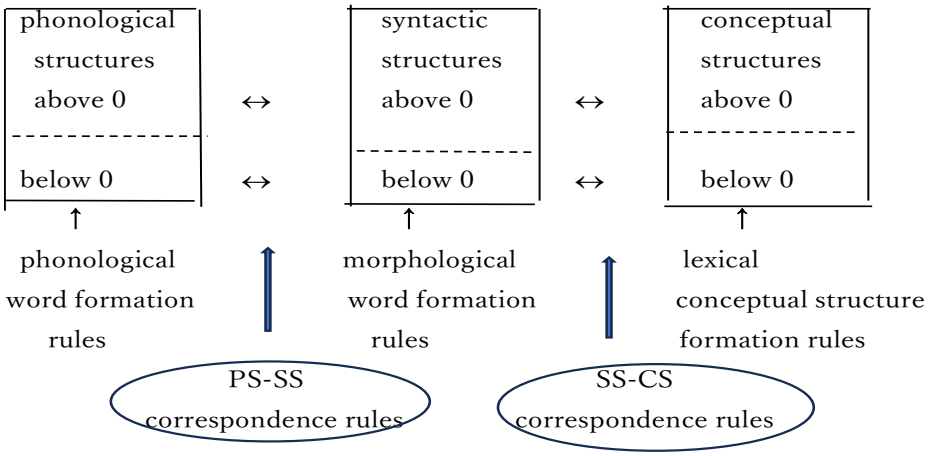
[1] ただし 2 モーラ以上でないと不可、状態動詞や限界性のある動詞とはなじまない。。

[2]「V に V」は「句」ではなく、形態的規則によって作られるものとする根拠として(i)のようにこの形式が分断できないことが示されている。　(i) a.*大会を目前にして、走りに、選手達は、走り込んだ
　　b.*大会を目前にして、選手たちが走り込んだのは、走りにだ。（影山 2013b:31）

・統語的操作対象としてひとかたまりの単位をなしているか	Syntactic St. above 0
・V2 の意味の希薄化（意味的結びつき）	Concept. St.
・形態音韻的な緊密性　（V1 のみの重複）	Phonological St.

◎二つの動詞の間の緊密性（結束性）は複数の観点から規定でき、それらの間にはミスマッチがある。

図 1　**Jackendoff** の表示的モジュール性を想定したモデル（**cf. Jackendoff 1997:39**）

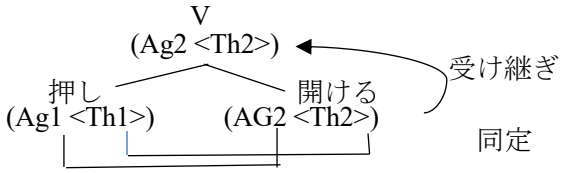


3. 項構造・統語的選択素性／格素性の決定と語構造

3.1　語彙的複合動詞の項構造や統語的選択素性はいかに決定されるか

◎影山 (1993: 106-107)：語彙的複合動詞の形成は項構造の合成による。→項構造が直接受け継がれる

(16)



◎由本 (2005)：語彙的複合動詞形成は LCS の合成によるものと仮定し、複合動詞の統語的性質は、合成された LCS と適切に対応する形で決定されると考える。(cf. 図 1)

(17)　x が y を蹴り倒す：

a. 概念構造：　[x] ACT ON [y]（「蹴る」の LCS）＋

[[x] CAUSE [[y] BECOME [[y] BE [AT [DOWN]]]　（「倒す」の LCS）

⇒　[$[x_i]$ CAUSE [[y_j]BECOME [[y_j] BE [AT [DOWN]]]]
挿入
[[x_i] ACT ON [y_j]]　　LCS 内での項の同定]

b. 項構造：<x, y>　下位範疇化：__NP　格素性：[+acc]

(18)　x が y を書き漏らす：

a. 概念構造：　[[x_i] CONTROL [[x_i] WRITE [z_j]]]　（「書く」の LCS）　+

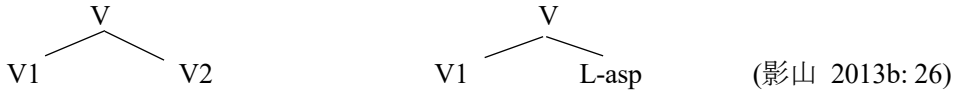
[[x_i] MISS [$_{Event}$ (y)]]　（「漏らす」の LCS）

⇒　[[x_i] MISS [$_{Event}$[x_i] CONTROL [[x_i] WRITE [z_j]]]]

b. 項構造：<x, z>　（x は経験者）　下位範疇化：__NP　格素性：　[+acc]

◎影山 (2013a, b)

(19)　a.　主題関係複合動詞の形態構造　　b. アスペクト複合動詞の形態構造



(影山 2013b: 26)

L-asp は、「機能範疇として働く」(ibid.: 26)動詞であり、一人前の動詞ではないと主張。
∴アスペクト複合動詞において形態統語的性質は、V1 のみによって決定されると考えられている。

(20) a. 「押しつぶす」（V1 が手段を表す）における意味合成
「つぶす」の LCS：[[x ACT $_{(Manner)}$] CAUSE [y BECOME [y BE [NOT-AT- WHOLE]]]]
「押す」の LCS を代入して意味を合成

b. ・「～渡る」（V2 は空間的アクツィオンスアルトを表す。e.g.　晴れ渡る）
「渡る」の意味：ALL OVER (e)
「～渡る」全体の意味解釈：e1 & ALL.OVER(e1)
・「～しきる」（V2 は継続を表す。e.g.　降りしきる）
「しきる」の意味：INCESSANTLY (e)
「～しきる」全体の意味解釈：　e1 & INCESSANTLY (e1)　(影山 2013: 23-26)

3.2　二つの動詞が補文関係にあると見なせる語彙的複合動詞の統語的素性

・アスペクト複合動詞の中にも、意味的には補文関係として扱うことができるものは多い。
（e.g.「V1 しきる」＝V1 が盛んに起こる、「V1 詰める」＝V1 をきわみに至らせる）

(21) ・事象の開始・着手：咲き初める、寝入る、思い立つ
・事象の継続・習慣：降りしきる、呼び習わす、泣き暮らす、遊びほうける
・事象の終了・完遂：泣き止む、煮詰める、書き上げる、あきれ果てる、
生き抜く、歌い納める、炊き上がる、見届ける[3]
・事象の進行・経緯：死に急ぐ、読み進める、すれ違う
・複数事象の相互作用：溶け合う[4]、居合わせる、見交わす
・行為の不成立・事象の中断：履き違える、伸び悩む、貸し渋る、聞き逃す、書き漏らす、
買い控える、売れ残る、食いはぐれる、出し惜しむ、攻めあぐむ (cf. 影山 2021)

(18)に従えば、LCS の合成においては V2 が複合動詞の主要部となっている　→　LCS において主要部である V2 が統語的選択素性・格素性も優先的に受け継ぐと考えられる。

(22) a. 健は稼業を勤め上げた。
b. *健は大学に勤め上げた。　cf. 大学｛に／*を｝勤める。

(23) a. K 高校は予選を勝ち抜いて甲子園出場が決まった。
b. *K 高校は予選を勝った。　/　K 高校は数々の強豪校に勝った。
cf. 村上の一打が三遊間を抜いた。

(24) a.　ぜいたく品を買い控える、
b.　タクシー料金が値上がりしたので、タクシー｛を／?に｝乗り控えている。

(25) a. 今日は刺身が売れ残った　／　*今日は刺身を売り残った
b. 食べ残す、とり残す、積み残す、そり残す／　散り残る、焼け残る、枯れ残る

(26) a. 肉を食べ過ぎた。　cf. 飲酒｛が／*を｝すぎた。
b. 魚を食べ飽きた。　cf. 魚｛に／*を｝飽きた。
c. 朝日を読みなれている（ので、変えたくない）。cf. 寒さ｛に／*を｝なれる。

3.3　V2 の原義におけるモノ項をデキゴト項にシフトして V1 と複合している場合

(27) a. 洋服にブラシをかける、シャツにアイロンをかける
b. 花子に催眠術をかける、敵に夜襲をかける

---

[3] 「届ける」は『広辞苑』『精選版日本国語大辞典』によれば、16 世紀ごろまでの単一語としての用法として、「最後までしとおす」が挙げられている。

[4] 「溶けあう」は、影山 (2013b: 18)ではアスペクト複合動詞に分類されているが、「溶けて（混ざり）合う」とパラフレーズできるので、主題関係複合動詞とも考えられる。

c. 同窓生に誘いをかける、芸に磨きをかける
d. 同窓生に誘いかける、通行人に呼びかける
e. *同窓生を誘いかける、*通行人を呼びかける　　(cf. 詳しくは由本 2008)
（「言葉をかける、声をかける」についても意味構造でデキゴト項へのシフトがある）
・これらについても V2 は動詞としての LCS および統語的素性を保持して複合している。

3.4　V2 が V1 を副詞的に修飾する関係と見なされている場合

(28)　書きなぐる、褒めちぎる、黙りこくる、黙り込む、眠りこける、咲きほこる、
慌てふためく、咲き乱れる、怒鳴りつける、叱り飛ばす、見とれる、
聞き惚れる、凍てつく、静まり返る、騒ぎたてる、沸き立つ、おそれ入る、
荒れ狂う、おだて上げる、震えあがる、落ち着き払う、
書き飛ばす、酔っ払う、握りしめる、笑い崩れる、見据える、待ち構える、
吹きすさぶ、[5]降り注ぐ、燃え盛る、威張りちらす、いじくり回す　　(影山 2021: 164-165)

「凍て付く」:「凍り付く」と同義。「こおってくっつく、すっかり凍る」(『広辞苑』)

（主題関係）　　（アスペクト？）

(29) a. シャツに染みがつく、包丁に錆がつく
b. 子供に噛みつく。　親にしがみつく　　主題関係複合動詞
c. 仕事にありつく、貧乏性に生まれつく
d. 錆びつく、凍りつく　　アスペクト複合動詞

(30) a. 乗客の口から発散する水蒸気が窓ガラスに凍り付きハイラルを離れて２０分後
にはすっかりわれわれの視界を奪ってしまう。
(尾崎彦朔著 『二十世紀の復習ノート』, 2004, 304 BCCWJ)
b. マグマが上がってきて、火山活動が生じ、地下に凍りついていた氷があった…
(河合隼雄ほか著 『先端科学の現在』, 1998, 404 BCCWJ)
c. こころに 錆びついてとれない あの日の言葉を...
(Judy and Mary 「あたしをみつけて」)
d. 刀剣がさやに錆びついてしまった。(作例)

(31) a.　($[[y_i]$ CAUSE) $[[y_{ij}$ BECOME $[[y_i]$ BE $[AT\ [z_j]]]]]$　y が z につく
b.　$[[y_i$ ACT -ON $z_j]$ CAUSE $[[y_i]$ BECOME $[[y_i]$ BE $[AT\ [z_j]]]]]$　y が z に噛みつく
「噛む」の LCS を代入　対象項が z と同定
c.　$[[y_i$ BECOME RUSTY] CAUSE $[[y_i]$ BECOME $[[y_i]$ BE $[AT\ [z_j]]]]$　y が (z に) 錆びつく
「錆びる」の LCS を代入　z が y と同定されると（部分全体関係による）具現されない。

(32) 糸が髪の毛｛*を／に｝からみつく、犬が子供｛*を／に｝噛みつく、*刀剣がさやへ錆びつく。
（cf. 糸が髪に絡む）　　（cf. 犬が子供を噛む）

(33) a. 教室に駆け込む／眠り込む＝睡眠状態に入り込む　　(cf. 由本 2013)
b. 紙吹雪を散らす　／　威張り散らす＝威張るという行為をまき散らす

◎(31)のような原義からの意味拡張分析が適用不可だとしても、(19b)の構造では説明できない事実

(34) a. 猫を撫で回す、外車｛?に／を｝乗り回す（cf. 車｛に／*を｝乗る）
b. 彼の名が国中に鳴りわたっている。
（cf. 鐘が会場｛*に／で｝鳴る、彼の知識は洋の東西にわたる）
c. 断雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色　(飛田良文，松井栄一，境田稔信編
『「明治期国語辞書大系」書誌と研究』, 2003, 813 BCCWJ)
d. 岸に漕ぎ返す、すばやく相手に切り返す（cf. ?岸に漕ぐ、*相手に切る）

---

[5] 「すさぶ」とは、『広辞苑 第七版』によれば、「傾向や動作がはなはだしくなる、心のおもむくままに事をする」ということで、元来事象を項とする動詞と考えられる。

e. 自由とわがままをはき違える／*わがままをはき違える　(cf. ⁇自由とわがままをはく)
f. 敵と刺し違える　(cf. *敵と刺す)
→　(20b)のように一人前の動詞としての LCS をもたないとしても、統語的素性は保持している。
◎動詞の自他の組み合わせ：V1 が他動詞の場合、その目的語を、適切に具現できるような V2 と結合することを保証するため、結合制約があると考えられる。
(35) a. 満開の桜｛*を／に｝見とれる。　（cf. 桜｛を／*に｝見る）
(「とれる（惚れる）」は『精選版 日本国語大辞典』によれば、自動詞)
b. フルートの音色｛*を／に｝聞き惚れる。（cf. 音色｛を／*に｝聞く）
(36) 「～入る」
・自動詞との結合：恐れ入る、あきれ入る、痛み入る、驚き入る、感じ入る、困り入る、染み入る、冷え入る
a. 岩に染み入る蝉の声、見事な技に感じ入る、*（全身に）冷え入る、
・他動詞との結合：眺め入る、恥じ入る、聞き入る、見入る
b. 過ちを深く恥じ入っている。（cf. 自分の不勉強に恥じ入る）
c. 太郎は、話｛に／*を｝聞き入っていた。
d. 花子は、テレビの画面｛に／*を｝見入っていた。

V2 の意味が希薄化して(20b)のような意味合成をしている「アスペクト複合動詞」でも、統語的選択素性の受け継ぎにおいては、(19a)のように V2 が、自律した動詞としての役割を果たしている場合が多く、これらには、他の語彙的複合動詞と同様の形態統語的な結束性があると言える。

4. まとめ

主な参考文献

Di Sciullo, Anna-Maria and Edwin Williams (1987) *On the Definition of Word*. MIT Press, Cambridge, MA.
伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社.
Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language*, The MIT Press, Cambridge, MA.
影山太郎 (1993)『文法と語形成』　ひつじ書房.
影山太郎 (2013a) 「語彙的な複合動詞と補助動詞」『レキシコンフォーラム No.6』 285-301.
影山太郎 (2013b)「語彙的複合動詞の新体系」『複合動詞研究の最先端』, 影山太郎（編）, 3- 46, ひつじ書房.
影山太郎 (2021)『点と線の言語学』くろしお出版.
Lapointe, Steven (1980) *A Theory of Grammatical Agreement*. Ph.d. Dissertation. University of Massachusetts, Amherst.
Scalise, Sergio and Antonietta Bisetto (2009) "The Classification of Compounds," *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, 34-53, Oxford University Press, New York.
由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語―モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房.
由本陽子 (2008) 「複合動詞における項の具現」、『レキシコンフォーラム』No.4,1-30.
由本陽子 (2013)「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」『複合動詞研究の最先端』, 影山太郎（編）, 109-142, ひつじ書房
由本陽子 (2023)「語彙的複合動詞における項の具現形式」『構文形式と語彙情報』, 岸本秀樹・臼杵岳・于一楽（編）, 189-203, 開拓社.

辞書・データベース

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）国立国語研究所／『広辞苑　第七版』岩波書店／『明鏡国語辞典　第二版』大修館書店／『精選版日本国語大辞典』小学館／『Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版）』国立国語研究所.